

10月の生育経過

早期作型のIV型（9/15頃定植）は、10月15日頃に出蕾期を迎えて下旬に開花期となった。9/20頃定植作型は10月下旬に出蕾し始めた。

普通ポットは、9/24頃定植で、10月末頃に出蕾期を迎えた。

今年は特に普通ポットで定植後に降水量が少なかったため、灌水が少ないところで生育の遅れが見られたが、全体的にはほぼ順調に生育している。

2番果房の分化状況は、早期作型で果房間葉数(内葉数)5～6枚前後で順調に分化しているが、生育が旺盛な株は果房間葉数が8枚以上と多いものもある。普通作型は昨年同様に果房間葉数4～5枚で分化期を迎えている。

病害虫は、定植後の炭そ病発症による植え替えが散見された。

ハスモンヨトウが9月下旬頃に発生したが、その他の病害虫の発生は少ない。

11月の栽培管理目標

10月末にほぼビニールの被覆が終わっている。今後、早期の作型では頂花房の着果期を迎え着果負担が増大、気温の低下に伴って草勢が低下しやすい時期になる。また、早進株や果房間葉数4枚程度で花芽分化している株も一部にあり、草勢、着果状況、果房間葉数に応じた温度、かん水、摘果等の管理により株づくりに努める。

今後の管理について

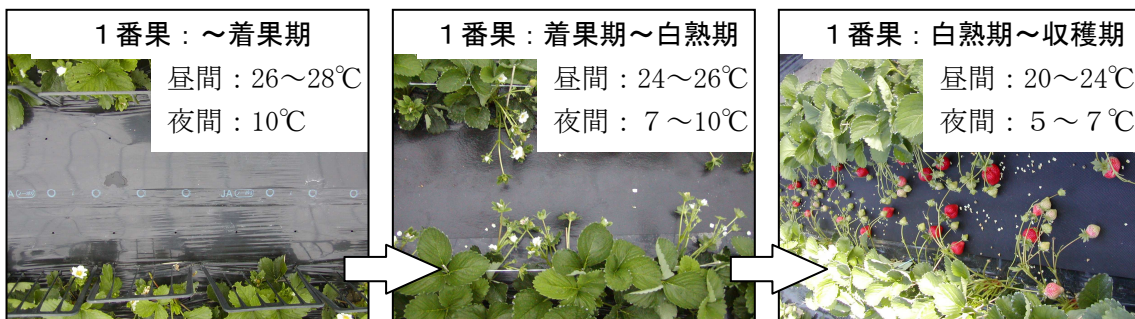
● 温度管理

着果状況に応じて、温度管理を変える。生育が遅れている場合は、高めの温度管理として生育を促進する。収穫期には低めの管理とし、果実の肥大を促進する。(特に早期作型)

外気の夜温が10℃を下回るようになったら(通常11月中旬)、ビニールを閉める。

12月からの加温機使用に向け、点検、整備しておく。

【 1番果房の生育状況別温度管理の目安 】



● かん水

草勢が落ちないように定期的に少量多回数のこまめな灌水を行う。

極端な多量灌水は裂果の原因となり、また、乾燥するとダニの発生拡大となりやすい。

通路は常に湿った状態とする(亀裂が入ると根が切れるため)。

朝、心葉から3枚目の展開葉に葉水(いつ液)が出なくなったときかん水する。

(草勢が落ちた場合も、葉水が出なくなる)。

収穫期間のかん水は、収穫後に行う。

● 液肥の施用

早期作型は頂果の収穫始め頃から、普通期は11月下旬頃から開始する。

液肥の開始以降は、定期的な施用により草勢が落ちないようにし、施用量は窒素成分で2kg/10a/月を2回以上に分けて行う。

● ジベレリン処理

2番果房出蕾期に5ppmで5cc/株の処理を行う。(湿度が高い時期や、かん水後の処理で効果が高くなる。)

◎ジベレリンの登録内容

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む 農薬の総使用回数
いちご (促成栽培)	着果数増加、 熟期促進	ジベレリン 10ppm	休眠に入る直前 (冬場の低温期)	1株当たり6回	茎葉全面散布 (1株当たり5ml)	1株当たり
いちご	果柄の伸長 促進	ジベレリン 10ppm	頂花の出蕾直後 ～開花直前	1花房当たり1回	株の中心部に 5ml散布	10回以内

● 玉出し・わき芽除去

頂果の着色が開始する前までに、黄種(種の黄化)対策、収穫効率化のため、軽く玉出しや葉よけを行う。なお、果梗は硬く折れやすい(しなりが無い)ため、無理に果梗を曲げない。

玉出し作業と同時に、発生しているわき芽・ランナーを除去する。

● 摘果

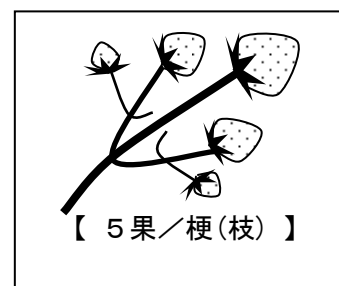
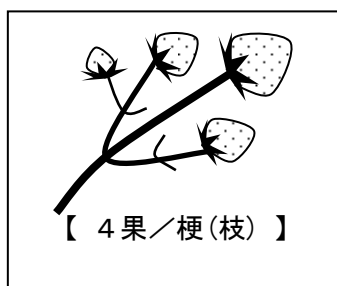
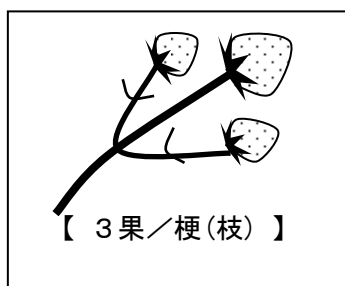
1番果房の摘果作業は、2番果房の出蕾を確認(または予測)した時点で行う。2番果房までの葉数、出蕾時期によって1番果房の着果数を決定する。

2番果房まで果房間葉数が2枚程度の「早進株」を認めた場合は、草勢維持のため強めの摘果を行い、2番果房合わせて1株当たり10～12果に着果数を制限する。

幼果の段階で奇形果は、早めに摘果する。

【「2番果房までの葉数・出蕾時期」と「1番果房の摘果後の着果数」の目安】

1～2番果房間葉数	4枚以下	5枚	6枚	7枚以上
2番果房の出蕾時期	1番果房の 収穫前	1番果房の 収穫直前	1番果房の 収穫前半	1番果房の 収穫後半以降
1番果房の着果数	7果以下 (3果以下/梗)	7果 (3果/梗)	7～11果 (3～5果/梗)	11果 (5果程度/梗)



● 電照

電照栽培により、新葉の伸長、受光体制の改善で草勢を維持する。

電照の点灯は、早期作型では11月10日頃、普通期は11月15～20日頃、2～3時間から開始し、着果量の増大とともに時間を延長する。

心葉展開時の葉柄長が10cm程度となるように時間の調節を行う。

草勢は、「心葉展開時の葉色」「心葉展開時の葉柄長」「2番果房頂果開花時の果房長」等で判断する。

草勢の状況を判断し、電照時間を調整する。



【心葉展開時の葉柄長による草勢判断と電照時間の調整目安】

草勢	弱い	適切	強い
心葉展開時の葉柄長	8 cm以下	9～10 cm程度	12 cm以上
電照時間の調整	時間を長く	現状維持	時間を短く

厳寒期の保温対策

(1) 暖房機の点検・清掃

- ・バーナーノズルの燃焼カス等による汚れは、完全燃焼を妨げるので、ノズルは事前に点検及び清掃または交換を行う。
- ・燃焼室内に燃料カスが付着すると、燃焼効率が低下するため、清掃を行う。

(2) ハウスの環境改善

- ・ハウスの妻部、出入り口、サイド部、谷部のビニールのつなぎ目の隙間を無くし、気密性を高める。
- ・ハウスサイドに内張カーテンを設置し、保温性を確保する。
- ・ダクトの長さ及び配置の見直しや、循環扇活用によりハウス内温度の均一化を図る。

ハウスサイドの内張カーテン



(3) 暖房温度の適正管理

- ・作物の生長点の位置にあわせて温度センサーを設置する。多段式サーモ装置のある暖房機の場合、これを十分活用し、無駄な高温管理はしない。

● 病虫害防除

防除薬剤を選定する際は、ミツバチへの影響日数に注意する。

【うどんこ病】

ビニールを被覆すると発生しやすくなるので、予防散布する。摘葉後に葉裏まで薬液が付着するように散布すると効果がある。

【オオタバコガ・ハスモンヨトウ等】

老齢幼虫になると農薬の効果が低下するので、若齢幼虫時（体長1 cm程度）に防除する。また、出蕾初期の防除を徹底する。

【ハダニ類】

補植苗でのハダニの持ち込みに注意する。摘除した葉をそのままハウス内に放置するとハダニが増えやすい。除去した葉は速やかにハウス外に持ち出す。

【スリップス（アザミウマ）類】

11月の発生が多いため、早期作型の開花期に注意が必要。年内の防除が不十分であると越冬虫が春先に増加し早い時期から被害が出るので注意する。

【灰色かび病】

蒸し込み気味の管理をするため、灰色かび病の発生には注意が必要である。発生前から予防的に防除する。

農薬の安全・適正使用を

- 1 散布前に必ず農薬ラベルで使用基準を確認！**
- 2 散布時には近隣作物や住宅街への飛散防止を徹底！**
- 3 散布後は必ず散布器具(タンク、ホース等)を洗浄！**
- 4 防除履歴の正確な記帳！**